

## 大学指導者がオリンピック出場から受けた影響 —レガシー研究に向けた基礎的考察—<sup>1</sup>

松瀬 学 (スポーツマネジメント研究室)<sup>2</sup>

阿部 征大 (スポーツマネジメント研究室)<sup>3</sup>

清宮 孝文 (日本体育大学大学院博士後期課程)<sup>4</sup>

関口 遵 (コーチ学研究室)<sup>5</sup>

### Abstract

Physical punishments and power harassment at college sport clubs are drawing much attention. Qualifications of sports coaches are being questioned. Sports education(instruction) at college is not only for athletic improvement but also for fostering Humanity, growth as human-beings. Coaches and instructions must understand this Olympic and Palalympic Games will be held in Tokyo in 2020. Top athletes are expected to enhance their athletic capability but we should not ignore the Human side of athletes.

This study aims to explore how Olympic Experiences influenced the awareness of coaches. If Olympic's Basic principles and values remain in their awareness, that can be consider as intangible positive Legacy of Olympic Games. 10 coaches at Nippon Sport Science University who had competed in the Olympic were interviewed. 908 codes were extracted and aggregated into 22 sub-themes and classified to 5 main-themes.

1. Olympic core values
2. Educational value of Olympics
3. Purpose of Olympic Movement
4. Basic capability as Adults
5. Athletes Entourage- good leaders

Especially, "Olympic being special event" and many other codes including "Respect" "Friendship" "Peace Movement" which are Olympic values. Trend of Teaching philosophy of these coaches is related to "Human Growth", "improvement of athletic capability" or "growth as athletes".

Although these were positive and negative comments about Olympics as a symbol the Peace,

---

<sup>1</sup> How Olympic Experiences influenced College coaches.—Basic Study on Olympic Legacy—

<sup>2</sup> Matsuse Manabu, Sports Management

<sup>3</sup> Abe Yukihiro, Sports Management

<sup>4</sup> Kiyomiya Takafumi, Graduate School of Health and Sport Science, Nippon Sport Science University

<sup>5</sup> Sekiguchi Jun, Coaching

Olympic experience gave these coaches opportunities to think about the Peace. Coaches gained those values through their participation in the Olympic Games and those values influenced their coaching philosophy.

Therefore this can be considered as an intangible Legacy of the Olympics. This study found that good sports coaches as consciously fostering the Human capabilities of athletes. As basic study on Olympic Legacy, it contains insights for growth and development of Human beings.

### 抄録

大学のクラブにおける体罰・パワーハラスメントに対する関心が高まる中、スポーツ現場における指導者の資質もより問われている。なぜなら、大学におけるスポーツ指導とは競技力向上と人間力育成の両面を併せ持つとされているからである。人間教育を図るべきとされる指導者もまた、優れた人間力とは何かを理解しておかなければならない。

2020年東京オリンピック・パラリンピックを迎える我が国において、トップアスリートの競技力向上が期待される半面、人間力向上も無視はできまい。そこで本研究では、オリンピック競技大会（以下、オリンピック）に選手として出場した指導者に着目し、その指導者がオリンピック体験から多くのことを感じ、その後の指導に影響を受けたであろう意識要因を明らかにすることを目的とする。結果、オリンピックの根本原則や価値が指導者に影響を与えているのであれば、それはオリンピックの無形のポジティブなレガシーとして考えることができる。

本研究では、過去のオリンピックにおいてメダル争いをリードしてきた日本体育大学に在籍するオリンピック出場経験を有する指導者10人に対し、質的調査（インタビュー調査）を行った。結果、908の意味単位（コード）が抽出されて、22個のサブテーマに集約され、さらに5つのメインテーマに分類された。メインテーマは、①オリンピックのコアバリュー②オリンピックの教育的価値③オリンピック運動の目的④社会人基礎力⑤アスリートアントラージュ良き指導者—になった、とくに「オリンピックは特別な大会」ほか、オリンピックの価値とされる『リスペクト』『友情』、および『平和運動』に関する意味単位が多数、抽出された。加えて、五輪を経験した人の指導の傾向として、『人間的成長』と「競技力の向上」、あるいは「選手としての成長」の関連性を意識させるものでもあった。

オリンピックがまた、「平和の象徴」であるとの見解に対しては、肯定的、否定的な発言があるにせよ、五輪出場が平和を考える契機となっていることが分かった。オリンピックに参加することで得た価値、そしてそれらの価値が指導者の指導方針に影響をもたらしていることからすれば、これはオリンピックの無形のレガシーともいえよう。

本研究では、よきスポーツ指導者は選手の人間力育成を意識していることも語られた。オリンピック・レガシー研究に向けた基礎的考察として、人間力向上、人材育成策を考える上で示唆となる情報を内包している。

Keyword : Olympic Experience, Olympic Values, Coaches, Humanity, Legacy.

キーワード：オリンピック経験，オリンピックの価値，指導者，人間力，レガシー

## 1. はじめに

大学の部活動における体罰・パワーハラスメントに対する関心が高まる中、スポーツ現場において指導者の資質がより問われている。なぜなら、これまでの研究で、大学におけるスポーツ指導とは競技力向上と人間力育成の両面を併せ持つとされているからである。人間教育を図るべき指導者もまた、優れた人間力を理解しておかなければならない。

関子 (2014, p150) によれば、指導者の「コーチングにおける目的と行動は主に2つに分類できる。その一つは、自らの行うスポーツ種目のパフォーマンス、すなわち競技力の向上を目的とした指導行動である。他の一つは、人間としてのライフスタイル、すなわち人間力の向上を目的とした育成行動である」とし、コーチングの目的は、競技力の向上と人間力の育成であると指摘している。この他、栗田ほか (2017) による大学のスポーツ指導者観の実態調査として、スポーツコーチング論の受講生にデータ収集を行ったものがある。その中で、良い指導者とは、「指導に対する価値観」、「指導技術」、「指導者の人格」を備えた指導者であると論じている。また人間形成の研究に関しては、武田 (1990, p149) が武道の強豪高校の指導者に着目し、「技能水準の高い高校剣道部指導の特徴は、勝利志向、理合適合的剣道志向および行動規範の拡大志向に求められる」とし、「正しい剣道（理合適合的剣道）を媒介としてのみ競技水準の向上と人間形成志向が両立することを示唆するものとみてまちがいない」と結論づけている。

つまり、人間教育を図るべきとされる指導者もまた、優れた人間力とは何かを理解しておかなければならないといえるだろう。2020年東京オリンピック・パラリンピックを迎える我が国において、トップアスリートの競技力向上が期待される半面、人間力向上も無視はできまい。そこで本研究では、オリンピック競技大会（以下、オリンピッ

ク）に選手として出場した指導者が、オリンピックで感じたことをどのように意識しているかを明らかにする。そのようにして明らかにされた指導方針を、オリンピズムを基本理念とするオリンピックの無形のレガシー（遺産）として議論することを狙いとしている。

本研究で対象にするオリンピックのレガシーとは何か。石坂ほか (2013, pp20-21) はレガシーの定義を「受け継がれ、遺されていくもの」とし、「そもそも、レガシーとは価値中立的な言葉であり、同じ対象であっても主体によって価値判断が分かれ、肯定的にも否定的にも評価されうるものを指す」とした。そして「2002年に国際オリンピック委員会（以下、IOC）が主催したシンポジウムでは、〈レガシー〉は「建築、都市計画、都市マーケティング、スポーツインフラ、経済開発と観光開発、（略）無形のレガシー：観念や文化的価値、（ジェンダー、エスニシティ、身体活動に基づく）知的で排他的な経験、大衆的記憶、教育、アーカイブ、努力の結集、ボランティアズム、ニュースポーツの実践家、グローバル規模の評判、経験やノウハウなど。ホストシティー、地域、国ばかりではなく、アスリート、観衆、オリンピック・ムーブメントと社会が総じて影響を与えながら、これら無形のレガシーが有形なレガシーの推進力となり、オリンピックの長期にわたるレガシーを発展させる」と解釈されているという。

また、石坂ほか (2013, p22) は、「レガシーの概念が拡張した有形／無形、直接的／間接的、短期／長期、ハード／ソフトの二分法は、インフラ整備や競技施設の建設といった物理的な遺産にとどまらず、ボランティア組織やイベント開催といった無形、ソフト面の遺産について考えることも可能にした」と指摘した。本研究はこの無形のソフト面のレガシーに着目したい。（図1）

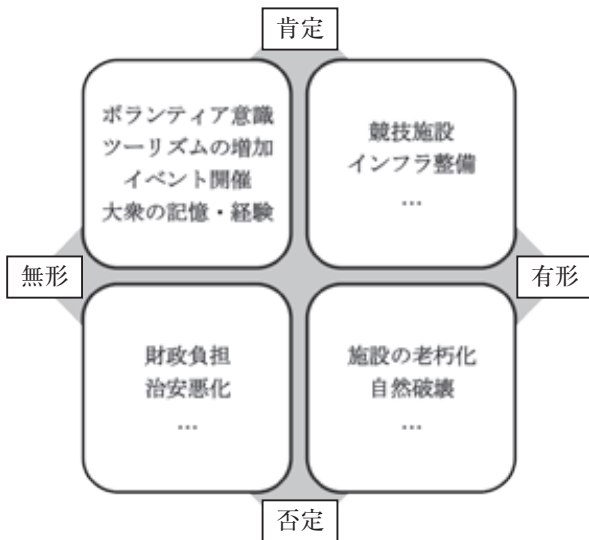


図1 オリンピックの遺産評価をめぐる概念図<sup>1)</sup>

オリンピック・レガシー研究としては、「長野市南長野運動公園多目的競技場の照明」(阿部, 1988)などの競技施設や、「長野オリンピックの経済効果と今後の長野経済圏」(平尾, 1988)などの経済効果等に関する研究がほとんどである。

オリンピックの理念はオリンピズムと呼ばれている。その理念は、近代オリンピックの創設者、ピエール・ド・クーベルタンの考え方に因るが、オリンピック憲章中の「オリンピズムの根本原則」には、次のように規定されている。「オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探究するものである。その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする」(国際オリンピック委員会, 2017, p10)。そして「オリンピズムの目標は、スポーツを人間の調和のとれた発達に役立てることにある。その目的は、人間の尊厳保持に重きをおく、平和な社会を推進することにある」(日本オリンピック・アカデミー編, 2008, p18)

つまり、オリンピズムの根本原則の規定からは、「教育的な価値の視点」「フェアプレーの精神」「平和な社会を目指すことの意義」を読み取ることが

できる。またオリンピックには「卓越性 (Excellence)」「友情 (Friendship)」「敬意 (Respect)」といわれる価値や「努力から得られる喜び」「向上心」「体と頭と心のバランス」といったオリンピック精神の教育的価値とされるものがある(国際オリンピック委員会, 2017, p10; 日本オリンピック委員会, 2014, pp6-7)。こうしたオリンピックによってもたらされる価値はどのようにして各個人に引き継がれるのだろうか。たとえば、オリンピック出場選手が指導者となる中で、その指導中に現れてくるのではないだろうか。

指導者は技術指導とともに、教育、人間的な指導にあたらなければならぬ。その人間的な指導の中にこそオリンピックの根本原則や価値が引き継がれる無形のレガシーがあるのではないかと考える。

指導者に関する先行研究は概ね、技術指導という観点から行われてきた。だが伊藤(2017)はコーチングにおけるひとつの標準的な定義として、「競技者やチームを育成し、目標達成のために最大限のサポートをする活動全体がコーチングである」と述べている。そのうえで、具体的な内容としては、アスリートの「有能さ (Competence) の向上」, 「自信 (Confidence), 関係性 (Connection), 人間性 (Character) の涵養」などを挙げている。佐良土(2018)は加えてコーチングが「選手の社会的・心理的な幸福の向上」にも関わる必要があるとも主張している。だが同時に佐良土は、「コーチング哲学」について主題的に論じたものは非常に少ないことも指摘している。

そこで、本研究は、オリンピック出場経験が大学スポーツ指導者のコーチングにおよぼした影響、そして、それ自体をオリンピックの無形のポジティブなレガシーとして考えることにし、レガシーとコーチングの具体的内容をつなげるこころみを図る。

## 2. 研究の目的

以上を踏まえて、本研究では、質的分析により、オリンピック大会に出場した選手が、その体験から多くのことを感じ、その後の指導に影響を受けたであろう意識要因を明らかにすることを目的とする。

オリンピック大会は、4年に一度の世界最高の国際総合大会であり、出場した者だけが得るグローバルな世界観、平和建設への希求、オリンピックの価値や教育的価値、倫理観というものがあるだろう。オリンピック大会に出場したことが、その後の指導に何らかの影響を与えているならば、それはオリンピック競技大会の無形のレガシーととらえることができると考える。このことは本研究が2020年東京オリンピック・パラリンピック大会に向けたレガシー研究として意義を有することを意味する。

## 3. 研究方法

本研究では、半構造化インタビューを2018年8月から10月にかけて、過去のオリンピック競技大会において日本全体のほぼ4分の1のメダルを獲得<sup>2)</sup>してきた日本体育大学に在籍するオリンピック出場経験を有する指導者十人に対し、イ

ンタビューを行った。家高(2012, p.76)によれば、「対象者の選択は、対象となる事例が理論的に飽和 (saturation) に達したとき、すなわち、それ以上の新しい事例を追加しても新たな属性や関連性が出現しないときに完了する」とされている。調査対象者は、1956年生まれから84年生まれの指導者で、84年ロサンゼルス五輪から2012年ロンドン五輪に出場した男性8名女性2名である。オリンピック出場時の年齢は18歳から41歳、メダル獲得者が半分の5名、1回出場は4名、複数回出場(2~5回)が6名だった(表1)。

対象者には、事前に調査の目的、方法、自由意思によるインタビュー参加を説明し、同意を得た。インタビュー調査は40~50分で、自由に発言できるように配慮した。また、承諾を得て、インタビュー内容をICレコーダーで録音した。なお調査実施に先立ち、本研究は「日本体育大学研究倫理審査委員会」による審査を受け承認された(番号:018-H060)。

インタビューでは、とくにオリンピック経験に焦点を絞って、①オリンピックの価値(卓越性)、②オリンピックの価値(友情)、③オリンピックの価値(敬意)、④オリンピック精神の教育的価値(フェアプレーなど)、⑤人間教育、規律などに関する音声データを集め、分類、整理することで、指導者の心理的構成概念の体系化を図った。

表1 インタビュー調査対象者

氏名	性別	生年	競技	出場五輪(年齢)	成績
A氏	男	1956	体操	1984(27)	金メダル
B氏	男	1957	ハンドボール	1984(26)	10位
C氏	男	1960	柔道	1988(28)	銅メダル
D氏	男	1962	アーチェリー	84(21), 88(25), 92(29), 96(33), 04(41)	銀、銅メダル他
E氏	男	1968	スピードスケート	88(19), 92(23), 94(25), 98(29)	5位他
F氏	男	1972	体操	1992(20), 96(24)	銅メダル他
G氏	女	1972	体操	1992(20)	60位
H氏	男	1978	レスリング	2004(26), 08(30)	7位他
I氏	女	1981	新体操	2000(18), 04(22)	5位他
J氏	男	1984	レスリング	2008(23), 12(27)	銀メダル他

インタビュー内容の分析にあたっては、インタビュー内容を逐語録にし、MAX-QDAを用いた。具体的には、質的データ分析として、インタビュー調査で収集されたテキスト情報について、注目すべき語句の切り出しを行い、次に著者が合議の上、それを説明するためのテーマ・構成概念（コード）を割り当て、ソフト上で同一のコード項目として分類、整理し、さらに構成概念が同じとみるカテゴリー化をおこなった。カテゴリー化においては、オリンピックの3つの価値や教育的価値、経済産業省の「社会人基礎力（12の能力要素）、日本オリンピック委員会が唱える「アスリートのアントラージュ（取り巻く関係者）」<sup>3)</sup>のコーチに求められる要素を参考とした。またコード化からカテゴリー化に至る一連の作業では、MAX-QDAの分析経験を持つ筆者が、コーチ学を学ぶ助教やスポーツ科学を学ぶ助教、博士後期課程の学生とともに見解が一致するまで合議した。

## 4. 結果および考察

### 4.1 メインテーマとサブテーマ、意味単位(コード)

本研究は、オリンピック出場から影響を受けたとみられる心理的要因を分析テーマとし、オリンピック大会に出場する前、および大会中、大会後に指導者になってから考えたことに関する意味単位を識別することを観点として分析を行った。この結果、本研究の対象となる908の意味単位が抽出された。これの意味単位は22個のサブテーマに集約され、さらに5つのメインテーマに分類された。(表2)

メインテーマは、【オリンピックのコアバリュー】【オリンピックの教育的価値】【オリンピック運動の目的】【社会人基礎力】【アスリートアントラージュ良き指導者】となった。(以下、メインテーマは【】、サブテーマは『』、コードは「」のカギ括弧で示す)

男女や出場五輪開催年、出場年齢、競技を問わず、インタビュー対象者10人全員から注出されたコードはただひとつ、メインテーマ【オリンピック運動の目的】のサブテーマ『オリンピズム』の中の「オリンピックは特別な大会」だった。五輪前、大会中、五輪後に関するいずれの質問にも発話があり、コード数は最多の42を数えた。代表的な発話を並べる。

・世界選手権選手とは言わないですね。でもオリンピック選手と言います。我々にとっては4年に一度、というのはやはり、大きいものがあります。(A氏)

・テレビの画面に出てくる大きな大会はオリンピックだったんです。だから画面に映るとなったらオリンピックしかなかった。(B氏)

・4年に一度っていうのもありますし、子どもの時からのあこがれとか、オリンピックでメダルを獲るといのはアマチュアスポーツにおいて大変意義があるとか、これが自分の最終地点というか、最後の目標だといので取り組んでいました。(C氏)

・他の競技団体の人と一緒になって、皇室のご出席のもと、結団式に出席したとき、これって全然違うな、これはすごい大会に出場するんだという自覚を持ちました。(D氏)

・オリンピックはやはり違うんですよ。マイナー競技であればそうじゃないですか。あの雰囲気。やっぱり4年に一度っていうか、4年間費やした過程でどれだけ何をしてきたかということじゃないですか。究極の緊張感ってここでしか味わえない。(E氏)

・メディアだったり、国民の関心だったり、世界選手権と比べると、オリンピックはだいぶ違う。そこが一番大きいのかな。(F氏)

・体操だけを考えたなら世界選手権が規模的には大きいですけど、周りからの評価というと、やはりオリンピックが一番大きいですね。(G氏)

・オリンピックという舞台が選手を変え、もしくは指導者を変えてしまっている部分もあるんじゃないでしょうか。(H氏)

表2 オリンピックに対するインタビュー・コード  
(▷はメインテーマ、左からサブテーマ、意味単位)

▷オリンピックのコアバリュー		コード数	発信者数
卓越性	ゾーンに入る	5	2
	無心の境地	1	1
	指導者の卓越性	2	2
	五輪は夢舞台	6	5
	五輪会場の雰囲気	2	1
	五輪の卓越性	1	1
	五輪選手の優越性	5	3
	集中力	2	2
	日本代表の自覚	1	1
	勝負の厳しさ	5	3
	世界のレベル	4	1
	強い人間	2	1
	友情	友情	3
国際的な友情		17	8
交流		1	1
国際的な交流		17	7
世代を越えた交流		3	2
信頼性の大事さ		1	1
闘いの場での友情の希薄さ		2	1
リスペクト	練習へのリスペクト	2	1
	ライバルへの感謝	2	1
	他者への尊敬	8	5
	己への尊敬	3	2
	感謝の大切さ	1	1
	指導者への感謝	2	2
	指導者への尊敬	7	5
	周りへの配慮	5	2
	周りへの感謝	5	2
	休罰禁止	2	2
	周りへの敬意	3	2
	ライバルへのリスペクト	15	6
	互いのリスペクト	4	2
	勝者へのリスペクト	1	1
	選手へのリスペクト	6	3
	親への感謝	1	1
	五輪への敬意	1	1
レガシー	勝利至上主義の弊害	6	2
	後輩への愛情	2	1
	指導者としての継承	16	6
	五輪の価値	17	7
	五輪出場の価値	7	4
	練習環境	7	4
	東京五輪の過熱さ	2	1
	東京五輪の価値	5	2
	レガシーへの反感	2	1
	東京五輪のレガシー	16	4
	五輪のレガシー	10	5
	競技力の継承	1	1

オリンピックの教育的価値		コード数	発信者数	
フェアプレー	指導者からの影響	8	2	
	日本独自のフェアプレー精神	4	2	
	フェアプレー	9	4	
自信	緊張感の大切さ	6	2	
	プレッシャー	2	2	
	自信	4	2	
	練習から得た自信	3	2	
	試合から得た自信	1	1	
	日本代表の意識	3	3	
体と頭と心のバランス	気づきの勧め	10	5	
	諦めない心	1	1	
	五輪メダルの価値	20	6	
	五輪出場への意欲	4	2	
向上心	目標設定に向けた向上心	5	4	
	向上心	4	3	
	功名心	1	1	
	指導者の務め	9	4	
	指導者の責任	11	6	
	時代に合った指導方法	6	3	
	指導方法	44	7	
	五輪メダルを逃した悔しさ	1	1	
	負けた悔しさ	1	1	
	自分との闘い	8	4	
	競技者としての成長	9	5	
	目的意識	1	1	
	目標設定	6	3	
	自立心	5	4	
	マイウエー	4	2	
	負けん気	3	2	
	勝利の喜び	3	1	
	あこがれ	2	1	
	努力から得られる喜び	努力が報われない不幸	1	1
		努力の大事さ	14	8
		努力を継続する才能	1	1
努力が実った喜び		2	1	
指導の喜び		9	6	
五輪での満足感		6	4	
周りの期待		1	1	
練習を楽しむ		4	2	
勝ち負けの大事さ		2	1	
生活の大事さ		1	1	
人間的成長		絶望感	1	1
		メンタルの大切さ	2	1
	謙虚さの大切さ	4	3	
	傲慢さ	1	1	
	礼儀の大切さ	17	6	
	成長の方法	8	4	
	人間力の大切さ	15	8	
	人間的な成長	12	6	
	人間教育の大切さ	21	8	
	自分の価値観	1	1	
	相手への感謝	4	2	
	敗北の価値	3	2	



オリンピック運動の目的		コード数	発信者数	
オリンピズム	五輪は特別な大会ではない	9	4	
	オリンピックは特別な大会	42	10	
	五輪金メダルの弊害	2	2	
	五輪への道程	14	7	
	五輪を意識	10	5	
	五輪の魅力	3	3	
	五輪への距離	7	4	
	伝統	3	1	
	勝者の自覚	1	1	
	五輪の過剰報道	2	1	
	イメージ戦略	1	1	
	スポーツの魅力	5	1	
	平和運動	平和建設への貢献	4	3
		五輪は平和の象徴	17	8
応援の力		5	2	
パワハラ禁止		1	1	
人種差別		5	1	
<b>社会人基礎力</b>				
チームワーク	チームワークの喜び	1	1	
	チームワーク	6	3	
考える力	考える力	1	1	
	悔恨	2	1	
	暗示をかける	2	1	
	イメージトレーニング	5	1	
	自己分析	4	3	
	成功の方法の創造	2	1	
	考える力の大事さ	1	1	
	アクション	時代にあった練習方法	2	2
選手の待遇	1	1		
メジャー競技	1	1		
メジャーとマイナー	2	1		
マイナー競技の苦勞	3	1		
マイナー競技組織	1	1		
大学運動部の運営	5	3		
指導者の変化	1	1		

アスリートアントラージュ良き指導者		コード数	発信者数
競技知識	年齢と技術力の関係	2	1
	目標設定の大事さ	2	1
コミュニケーション	時代に合ったコミュニケーション方法	10	4
	日本代表の一体感	2	1
規律	体調管理	1	1
	規律	4	3
	五輪の安全対策	9	2
	五輪の厳重警備	1	1
情熱	競技経験と指導力は別物	1	1
	全力投球	1	1
	完全燃焼	2	2
	逆境に屈しない力	6	2
	指導者のつらさ	1	1
	指導の違い	4	2
	選手の覚悟	3	2
	モチベーション	3	2
ポジティブ・シンキング	積極的な姿勢	6	5
	ピンチをチャンスに変える	3	1
	世界観	6	4
	運	2	1
モチベーター	言語化の効果	2	1
	映像によるモチベーター	2	1
	ライバルからのモチベーター	1	1
	言葉によるモチベーター	19	9
	本によるモチベーター	2	1
	指導の難しさ	12	7
	指導者の覚悟	3	2
	指導者としての目標	7	5
	指導者の理想像	5	2
	指導者としての挫折	3	2
	指導のこだわり	13	6
	指導のタイミング	1	1
	ビジョン	本気にさせる	1
幸せな競技人生		5	3
人生設計		17	6
五輪の面白さ		4	3
五輪金メダルが目標		3	2
東京五輪への期待		4	3
合計		908	10人

・選手村もあって、日本のチームで丸となって戦っているような心強さ、安心感は、オリンピックでしか味わえないというのを、現地に行って感じました。(I氏)

・オリンピックではひとつの街が動かされる。東京オリンピックだったら東京の、北京オリンピックだったら北京の街全体がオリンピック一色となる。新しい道路までできる。オリンピックは特別な祭典だということを僕は選手に伝えています。(J氏)

2016年にリオデジャネイロ(ブラジル)で開催された第31回オリンピック競技大会には、日本オリンピック委員会(以下、JOC)の報告書によると、207カ国・地域(オリンピック個人参加選手団及びオリンピック難民選手団を含まない)から1万1千238人が参加した。日本は601人(役員263, 選手338)が参加し、26競技308種目が実施された<sup>4)</sup>。

またオリンピック大会のテレビの視聴者は世界で40億人規模になり、IOCの主要な収入源である放送権料収入は、2016年リオデジャネイロ五輪では28億7000万ドル(約3000億円)に達した<sup>5)</sup>。またメディアは合計で1万4000人ほどがカバーした。巨額の放送権料を払う米国NBCが1000人を超す大取材団を派遣し、日本のNHKも約280人をリオに送り込んだ。

毎年、あるいは隔年開催の世界選手権と違い、4年に一回開催のオリンピック大会は、選手たちに特別感を抱かせる。競技年齢の推移、運も無関係ではあるまい。参加国、出場選手数も制限されており、オリンピック出場は極めて狭き門となっている。

反面、4人からは「五輪は特別な大会ではない」とのコードも抽出された。特徴的な発話を並べる。

・選手時代は、オリンピックも世界選手権も意識はなかった。(A氏)

・自分の中では、競技レベルはもしかしたら、世界選手権が高いのかなと思うぐらい。あるいは、世界選

手権もオリンピックも同等の競技レベルじゃないかと。(F氏)

・国のためとか正直もう、あまり考えられなかった。自分の力を出し切ることしかできませんから、はっきり言って、どの大会も一緒だと思うんですよね。(I氏)

一人は21歳の時から41歳の時まで、5大会のオリンピックに出場している。競技に関していえば、オリンピックは特別ではない。半面、お互いへのリスペクトも感じさせる。

・勝っても、負けても、どの大会も、競技場の中のアーチェリー関係者の中では、ほとんど何も変わりません。どこの国の選手でも、勝った選手には、今までのチャンピオンと同じように「良かったね」、銀メダル、銅メダルには「残念だったね」、負けた者同士だと「次、頑張ろうね」と言うのです。(D氏)

競技面において五輪は特別でない、ということであるならば、「五輪は特別」というコードは競技以外のオリンピックならではの要因に因ると見るのが妥当であろう。

#### 4.2 オリンピックのコアバリュー『友情』『リスペクト』『レガシー』

オリンピック競技大会を主催するIOCはオリンピック憲章の「オリンピズムの根本原則」において、オリンピックのコアバリューを卓越性(Excellence)、友情(Friendship)、敬意/尊重(Respect)という3つのキーワードで表現している。加えて、同憲章には、IOCの使命と役割として「オリンピック競技大会のよい遺産を、開催国と開催都市に残すことを推進すること」と明記されている。

メインテーマ【オリンピックのコアバリュー】のサブテーマ『友情』をみると、「国際的な友情」「国際的な交流」のコードがそれぞれ17個の意味単位で構成された。五輪後の質問に対する発話に多く、見られた。まず「国際的な友情」の特徴的

な発話を並べる。

・ライバルから手紙が来たりしました。その内容は、俺は悔しかったけれど、最高のチャンピオンに負けたのだから諦めがつくよ、といったものでした。(A氏)

・勝ったり、負けたりしながら、世界にも友だちができた。海外にはいろんな友達がいる、その関係性は深くなってきています。(C氏)

・要は冬のシーズンはずっと、同じ顔触れで試合を転戦しているのだから、友情といえば、他の競技よりもっと深いと思います。とくに世界共通のルールのもとに行う最大のイベントがオリンピックはみんなで創り上げるという意識があります。(E氏)

・オリンピックで一緒に選手でやっていた人がコーチになってくると、「ああ」っていう感じで話がひろがっていくような気がします。(G氏)

・言葉は通じなくても、オリンピックの、共通のスポーツの中で得た友情であったり、絆であったり、それは今でも続いています。(H氏)

・イスラム圏の方がいたり、アメリカや北朝鮮の選手がいたり、オリンピックではそんな人種、国籍は関係なく、友情というか、ひとつのコミュニティができあがっているなと思います。(J氏)

類似のコードながら、「国際的な友情」に発展しうる「国際的な交流」の発話も並べる。

・オリンピックの閉会式って、みんなハイテンションでわーっとなって、いろんな国の連中と混ざっちゃうんです。(D氏)

・オリンピックの意義という意味では選手村が大事なわけでは、いろんな国の、いろんな競技団体の選手が同じエリアで宿泊することになる。それだけでも、すごい大会に来たなって、モチベーションが上がります。(G氏)

・やっぱりスポーツを通じた国と国との交流は、指導者となってからも、広めていかないといけないと強く思っています。(H氏)

・オリンピックの時は、運営する人たちが新体操開

係者以外のボランティアも入ってきたりするので、「頑張ってるね」とか、そういう人たちのピュアな反応が面白いです。(I氏)

・オリンピックはやっぱり、ボランティアの方と話したり、ピンバッジを交換したり、写真撮ったりするのもあります。(J氏)

またサブテーマ『リスペクト』は、6人から15個の意味単位が識別・集約された「ライバルへのリスペクト」のほか、「互いのリスペクト」「選手へのリスペクト」「勝者へのリスペクト」「指導者への尊敬」「指導者への感謝」「周りへの配慮」などの計17のコードで構成された。とくにオリンピックの競技ではライバルへのリスペクトが不可欠であろう。個人競技、チーム競技関係なく、「ライバルへのリスペクト」が示された。

・本来のスポーツマンシップに尊重はあったと思う。負ければやっぱり悔しいです。でも、それでも相手を讃える。そういう精神が大事です。(A氏)

・健闘を讃え合うのは大事です。相手に敬意を表するとか、戦ってくれてありがとう、という気持ちを大切にしたい。(C氏)

・負けた悔しさはありますが、あの演技をされたら仕方ないなという時もあります。やっぱり強い選手の演技は感動しますからね。(F氏)

・敵だけれども、一緒に刺激し合って伸びていこうというのはあります。(G氏)

・どれだけ頑張ってるオリンピックに懸けて努力してきたかというのを知っているので、よかったチームには心からおめでとうと声をかけます。(I氏)

また【オリンピックのコアバリュー】のサブテーマ『レガシー』をみると、計12個のコードが、91個の意味単位で構成された。レガシーは近年、IOCが最も力を入れているテーマで、2002年11月のIOC総会でレガシーに関する規定がオリンピック憲章に盛り込まれた。IOCによれば、レガシーとは「長期にわたる、とくにポジティブ

な影響」とされ、その分野として、スポーツ、社会、環境、都市、経済の5つを挙げている<sup>6)</sup>。

2020年に東京オリンピック・パラリンピックを迎える日本にとっても、レガシー創出は検討テーマのひとつである。文部科学省(2015)は2015年、「オリンピック・パラリンピックレガシーには、競技力の向上や競技施設等の競技大会に直結したレガシーをはじめとして、社会に影響をもたらす有形・無形、計画的・偶発的な幅広いレガシーがある」とした。文科省の報告書に即せば、「わたしが変わる」とも記されており、内面的な意識改革も無形のレガシーと捉えられなくもない。

オリンピック出場経験を持つ指導者はレガシーとして何を語るのか。「五輪のレガシー」としての意味単位の要約は10個、「東京五輪のレガシー」が16個である。特徴的な「東京五輪のレガシー」の発話を並べる。

・東京オリンピックにはハンドボールの男女が出ますから、私たちと同じように、東京に出場した者が、良くも悪くも、経験したことをきちんと次の世代に伝えていくことが大事ですね。(B氏)

・あえてレガシーは何かといえば、ぜひ、子どもたちが直接現場で、生のゲームを見られる機会をたくさんつくってあげられるような日本であってほしいと思っています。(D氏)

・オリンピックに出ないと感じられないものというがあるので、出場した選手は、そういう経験をみんなに伝えていく必要があります。(F氏)

・やっぱりスポーツの世界って結構、交流があるようで、ないような気もするんです。そのつながりが、オリンピックでつくられたらいいな、と思います。(G氏)

『レガシー』の中のコード「指導者としての継承」もまた、16個の意味単位が拾われた。顕著な発話を並べる。

・オリンピックに出場する可能性がある選手は化け

て、ほんとうにオリンピックに代表になっていく。代表選手になって学んだものを次の人たち、後輩たちに伝えていく。この大学はそのノウハウがずっと受け継がれている。(F氏)

・指導者として受け継いでいるところは常に真剣勝負ということですよ。オリンピックの舞台を経験させてもらって、それを次の世代につなげていくのが僕の役割だと思っています。(H氏)

・オリンピック選手として、オリンピックに出ることよりも、経験を伝えることのほうに価値があるんじゃないかと思っています。(I氏)

・自分のやってきたプロセスを、指導者として次に伝えていきたい。(J氏)

オリンピックに出場した選手の多くは、指導者、環境に感謝し、オリンピック選手、あるいは後継者をつくることに努める傾向にある。いわば当該スポーツ界への恩返しか。オリンピックでの経験が、指導者としての基盤を形成することに重要であったと考えられる。

#### 4.3 オリンピック運動の目的『平和運動』

オリンピックの基本理念、オリンピズムは、オリンピック憲章の冒頭の「オリンピックの根本原則」において、「オリンピズムの目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会を奨励することを目指し、スポーツを人類の調和のとれた発展に役立てることにある」と規定されている。

このオリンピズムという理念が存在することが、普遍的かつ恒久的に世界平和の建設に寄与すること、すなわち「オリンピック運動(オリンピック・ムーブメント)」を貴いものになっている(日本オリンピック・アカデミー編、2008)

近代オリンピックを生み出したピエール・ド・クーベルタン男爵は1963年、名門貴族の三男としてパリで生まれ、多感な少年期、1970年に起きたフランスとプロイセン王国との普仏戦争、翌年、ナポレオン3世の第二帝政が倒されて第三共和制に移行するなど混乱期を体験した。だからこ

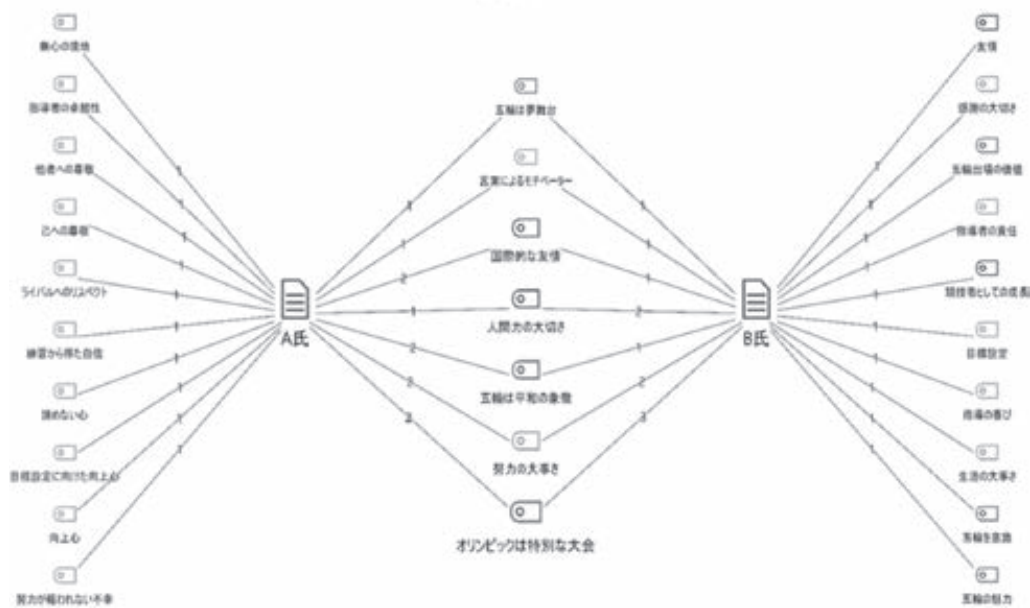


図2 ロサンゼルス五輪出場者のコード比

そ、平和への希求が強まり、スポーツを持ち込んだ教育において、平和な社会の構築を夢見たのである<sup>7)</sup>。

オリンピック運動とはすなわち、世界平和建設に寄与することである。【オリンピック運動の目的】のサブテーマ『平和運動』のうち、コード「五輪は平和の象徴」には8人、計17個の意味単位があった。戦後のオリンピックの歴史において、1980年のモスクワ五輪は平和を考えさせる契機となった。ソビエト連邦（現ロシア）のアフガニスタン侵攻に抗議した米国の呼びかけに応じ、日本、カナダ、西ドイツや韓国、さらにはソ連と対立関係にあった中国やイスラム諸国など50カ国近くがオリンピックへの参加をとりやめた（松瀬，2008）。

モスクワ五輪の直後の大会は、1984年のロサンゼルス五輪である。これには、モスクワ五輪の報復として、ソ連などの東側諸国がボイコットをした。その大会に出場した3人（A氏、B氏、D氏）の発話のコードを比較してみた。3人とも「五輪は平和の象徴」の発話があった。その時代背景がオリンピック出場時における発話に影響を及ぼしていると考察できる。

まずA氏とB氏を比較してみると、共通コー

ドは「五輪は平和の象徴」のほか、「オリンピックは特別な大会」「五輪は夢舞台」「言葉によるモチベーター」「国際的な友情」「人間力の大切さ」「努力の大事さ」となった。A氏はオリンピック出場時に27歳、B氏が26歳とある程度、その競技の中堅選手となっていたと考えられる。特にA氏は1980年モスクワ五輪に出場する可能性が高かったため、その分、ロサンゼルス五輪出場時に平和のありがたみを改めて知ったといえる。（図2）

A氏の「五輪は平和の象徴」と意味集約された発話は、次の通りである。

- ・モスクワが流れた時に“なんでだろう”という想いと、やっぱり平和でないとオリンピックは開催されないんだということを実感した。
- ・モスクワを経験したからこそその平和。

反面、B氏は平和に言及しながらも、ロサンゼルス五輪出場時には「はっきり言って、大会中は平和を考えてはいなかったですね」とも述べている。

加えて、A氏とD氏の発話のコードも比較してみる。オリンピック出場時、A氏が27歳に対し、D氏は大学生の21歳だった。またA氏は金メダ



図3 ロサンゼルス五輪出場者のコード比

ル、D氏は銅メダルを獲得している。共通コードは「五輪は平和の象徴」のほか、「積極的な姿勢」「他者への尊敬」「五輪は特別な大会ではない」「幸せな競技人生」「ゾーンに入る」などである。D氏の「五輪は平和の象徴」に意味集約された発話を並べる。平和の象徴という位置づけに批判的でありながらも、平和を考える動機付けに影響しているといえる。(図3)

- ・オリンピックを無理やり平和だ何だとか、こじつけていくのが、僕は極めて嫌なんです。
- ・当時21歳で、国際平和を意識できなかったですよ。
- ・オリンピックというのは、僕なんかにすると、世の中が平和じゃないことを学ばしてもらえる場でした。

A氏、B氏、D氏の3人に共通しているコードは「五輪は平和の象徴」のほか、「オリンピックは特別な大会」「言葉によるモチベーター」「人間力の大切さ」「努力の大事さ」の5つとなった。「人間力の大切さ」「努力の大事さ」は時代に関わらず、オリンピック選手が意識する共通コードである。

平和に関連すれば、オリンピックは国際的に注目されるから、テロの脅威に脅かされることにな

る。2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件のあと、国際イベントの警備は強化された。オリンピックをみると、2004年のアテネ五輪は嚴重警備がしかれた。2000年のシドニー五輪、およびアテネ五輪に出場したI氏はコード「五輪の安全対策」でこう、印象を述べている。

- ・アテネオリンピックの時は、シドニーオリンピックの時より、すごく嚴重な警備がされていて、選手パスもいちいち、入り口で金属探知機みたいなもので毎回検査されていました。
- ・日本の選手が街に出ようとしたら、ちょうどアテネでデモが起きていたので、危険だから選手村の外には出ないでくださいという命令が出されていました。
- ・オリンピックは平和の祭典と言われているのに、表裏一体で危なさも抱えているんだなというのは感じました。

I氏は、IOCが唱えるオリンピックのコアバリュー（卓越性、友情、敬意／尊重）や平和の祭典などについて、「自分が大会中に感じていたことが、実際、IOCが言っていたことだなというような感じがしました」と述べている。

#### 4.4 人間的成長

前述のオリンピック憲章の「オリンピズムの根本原則」において、「オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学」(国際オリンピック委員会, 2017)である,とも規定されている。本研究では,とくに人間力の育成に着目している。人間力の乏しい指導者が,選手の人間力を育成するのは困難であろう。JOCが策定した「アスリートのアントラージュ(取り巻く関係者)が大切にしたいもの」によると,指導者に求められることとして,メインテーマ【アスリートアントラージュ良き指導者】のサブテーマ『競技知識』『コミュニケーション』『規律』『情熱』『ポジティブ・シンキング』『モチベーター』『ビジョン』が必要とされている。

またメインテーマ【オリンピックの教育的価値】のサブテーマ『人間的成長』をみると,意味単位として「人間教育の大切さ」など12のコードが抽出された。

コード「人間教育の大切」には8人,計21個の意味単位が集まった。特徴的な発話を並べてみる。

・ちゃんと話をします。大まかな事を言わず,具体的にね。「お前が相手の立場に立って,こういうふうに言われたらどう思うんだ」。「それを考えなきゃダメだろう」って。(B氏)

・指導は,嘉納治五郎先生の精力善用,自他共栄からスタートしている。だから,人間的な幅を持った選手をつくる,学生をつくるというのは一番ですね。(C氏)

・最低限,守らなきゃいけないルールはある。怒らないといけないこともある。怒るといふか,ちゃんとやるうって言うことは言います。(F氏)

・人間教育っていえば,すべてが当てはまる感じがします。あいさつもそうです。(G氏)

・競技力向上を考えていますが,人間教育も並行してやっていかないといけない。そうじゃないと,最終的には良い選手,良い人間は育ちません。気づく人間

をつくりたい。(H氏)

・フェアプレーとか人間教育というのは,高校まで教えていただいた先生から厳しくしてもらっていました。あと親と。(I氏)

・ナショナルトレセンでは全員,ちゃんとあいさつします。あれはオリンピック選手を育てる教育の一環なのかなと思います。(J氏)

オリンピックに選手として出場したスポーツ指導者は,技術指導だけでなく,人間教育が選手としての成長に影響していると考えているのである。

#### 5. 結論

本論では,オリンピックに出場した選手が,その体験から感じたこと,その後の指導に影響を受けたであろう意識要因が明らかになった。

質的分析により,908個の意味単位は,【オリンピックのコアバリュー】【オリンピックの教育的価値】【オリンピック運動の目的】【社会人基礎力】【アスリートアントラージュ良き指導者】の5つのカテゴリーに大別された。とくに「オリンピックは特別な大会」ほか,オリンピックの価値とされる『リスペクト』『友情』,および『平和運動』についての意味単位が多数,抽出された。加えて,五輪を経験した人の指導の傾向として,『人間的成長』と「競技力の向上」,あるいは「選手としての成長」の関連性を意識させるものもあった。

具体的には,4人が競技する場面においては「五輪は特別な大会ではない」との意味単位を発しながらも,全員から,競技以外の五輪選手村,閉会式などの体験を踏まえ,「五輪は特別な大会」とのコードが抽出された。あるいはオリンピックが「平和の象徴」であるとの見解には対しては,肯定的,否定的な発話があるにせよ,オリンピック出場が平和を考える契機となっていることがうかがえた。オリンピックに参加することで得た価値,



そして、それらの価値が指導に影響をもたらしていることからすれば、これは無形のレガシーといえよう。

本研究では、指導者の語りの中からオリンピックの価値について質的分析をこころみた。その結果、スポーツ指導者は選手の人的成長も意識していることが語られた。ただし、本研究の枠組みでは五輪経験と指導方法との関係や影響度が明確に検証できたとはいえない。今後は五輪経験と指導法との関係や影響度を含めたメカニズムを解明する研究が必要である。

2020年東京オリンピック競技大会に向けて日本の国際競技力向上が求められている。併せて、レガシーとしては、新国立競技場などのハード面とはちがう、人材育成やオリンピックの価値の浸透、平和運動の推進などのソフト面にも注目されるべきである。本研究の成果は、国際競技力向上策と両輪で推進していく必要がある人間力向上、人材育成策を考える上で示唆となる情報を内包していると考えられる。

#### 注および引用文献

- 1) 石坂ほか (2013) の p.23 の図1 を参考に筆者作成。
- 2) 日本オリンピック委員会 (JOC) 公式サイトと日本体育大学公式サイトによると、日本の過去の夏季、冬季獲得メダル数は金メダル156個、銀157個、銅184の計497個。日体大関係者 (現役、大学院、卒業生) は金39個、銀45個、銅47個の計131個となり、全体の26%におよぶ。  
(<https://www.joc.or.jp/games/olympic/winnerslist.html>) 2019年3月12日閲覧。  
(<https://www.nittai.ac.jp/olympic/history/index.html>) 2019年3月12日閲覧。
- 3) JOCの公式サイト「アスリートのアントラージュ (取り巻く関係者) が大切にしたいこと」の「2. コーチに求められること」より

引用。

([https://www.joc.or.jp/about/entourage/pdf/athlete\\_entourage.pdf](https://www.joc.or.jp/about/entourage/pdf/athlete_entourage.pdf)) 2019年3月12日閲覧。

- 4) JOCが大会後リリースした「第31回オリンピック競技大会 (2016/リオデジャネイロ) 概要報告」から引用。
- 5) 2018年2月19日発のロイター電の特集原稿「不祥事でも揺るがぬ五輪マネー、アジアがけん引」から引用。  
(<https://jp.reuters.com/article/olympics-2018-ioc-asia-idJPKCN1G30LR>) 2019年3月12日閲覧。
- 6) 三菱総合研究所「レガシー共創サイト」の「オリンピック・レガシーとは何か」より引用。  
(<https://www.mri.co.jp/opinion/legacy/pdf/olympic-legacy.pdf>) 2019年3月12日閲覧。
- 7) 笹川スポーツ財団。スポーツの歴史 第2章 オリンピックとは。「クーベルタンとオリンピックの復興」より引用。  
(<http://www.ssf.or.jp/history/essay/tabid/1124/Default.aspx>) 2019年3月12日閲覧。

#### 参考文献

- ・阿部和雄 (1998)。長野市南長野運動公園多目的競技場の照明 (<特集>長野オリンピック)。照明学会誌, 82 (1)。pp.23-25。
- ・石坂友司, 松林秀樹 (2013) <オリンピックの遺産>の社会学 長野オリンピックとその後の10年。青弓社。
- ・伊藤雅充 (2017) コーチとコーチング。日本コーチング学会編。コーチング学への招待。大修館書店。pp.12-32。
- ・栗田昇平, 矢野裕介, 山本浩二, 中山忠彦 (2017) 大学生の保持するスポーツ指導者観の実態とその変容可能性—福祉系大学体育系学科3年生を対象として—。神戸医療福祉大学紀要, 18 (1): pp.11-18。
- ・国際オリンピック委員会 (2017) オリンピック

- 憲章（2017年9月15日から有効）。
- ・佐良土茂樹（2018）「コーチング哲学」の基礎づけ。体育学研究, 63（2）：pp.547-562.
  - ・武田正司（1990）高校剣道部の競技水準と人間形成志向。盛岡大学紀要, 9：pp.143-149.
  - ・凶子浩二（2015）コーチングモデルと体育系大学で行うべき一般コーチング学の内容。コーチング学研究, 27（2）：pp.149-161.
  - ・日本オリンピック・アカデミー編（2008）ポケット版オリンピック事典, 楽出版.
  - ・日本オリンピック委員会（2014）JOCの進めるオリンピック・ムーブメント.
  - ・平尾勇（1998）. 地域経済レポート長野オリンピックの経済効果と今後の長野経済圏. レジャー産業資料 31（5）. pp.172-177.
  - ・松瀬学（2008）五輪ボイコット—幻のモスクワ～28年目の証言. 新潮社.
  - ・文部科学省（2015）オリンピック・パラリンピックレガシー創出に向けた文部科学省の考えと取組.
  - ・家高洋（2012）現象学的看護研究の基礎的考察2：インタビューの方法論を手引きとして. 大阪大学紀要, 医療・生命と倫理・社会, 11：pp.73-93.

（受理日：2019年5月7日）